

## 保育計画成果報告書

法人名等	株式会社SEIWA GLOBAL
施設名	はぐみこども園
報告者（役職）	高田 茜（園長）
住所・連絡先	大阪府高槻市赤大路町17-14
	☎ 072-600-0170
	E-mail info@hug-me.co

### ○タイトル（保育計画）

水遊びや泥んこ遊びを通じて子どもの探求心・思考力・発想力を育む

### ○主な助成備品

園庭用水道

## 1. 保育計画策定の目的

はぐみこども園は2021年に開園したばかりの定員70名の園です。「子どもが主役の保育」を保育理念とし、子どもたちの興味がある遊びをとことん遊びこめるような保育環境を保育室内・園庭ともに作りこんでいくため、職員も日々遊び環境作りに試行錯誤している日々です。

園庭には身体を動かして遊ぶ遊具の他に子どもたちの大好きな砂場があります。季節の移り変わりがわかるように「ミモザ」「桜」「ツツジ」「紅葉」「どんぐり」「ヤマボウシ」「山吹」など様々な植物が植えてあり、子どもたちは季節ごとに綺麗に咲く花や色を変える葉、木になる実をつみ、砂場でいろんな料理を作って遊んでいます。

砂場の横に新しく設置された水道は、そんな子どもたちの想像力いっぱいの砂場での料理作りを豊かにしてくれました。自分の料理を「カレー」にしたい時には少し水を足してみたり、お茶を入れる時は水、コーヒーを入れるときは水と砂を混ぜたものをコップに入れてみたりしていました。日々の経験の中で水に親しみ、利用している子どもたちの姿をみた保育者から「改めて水の性質にふれ、水遊び・泥遊びがより広がっていくような環境を作ろう」と声があがりました。「水」の性質を改めて知ることができるように導入を行い、「砂に少し水を混ぜてみたらどうなるかな?」「水が流れるってどういうこと?」と子どもたちの日々の気づきから発生する探究遊びを春～秋にかけて展開してきました。

## 2. 具体的な実施内容

雨上がりの園庭にできた水たまりをみて子どもたちが泥んこ遊びを始めた5月頃から、保育者の中で「砂」「水」「泥」に触れて遊ぶための環境作りが始まりました。まずは色水

遊びから取り組み、子どもたちが「水」の性質をよく知り、親しめるように保育を展開していきました。どんな容器を使ったらいいか？色水を作るにはどんな花が適しているのか？水はどのくらい混ぜたらよいか？などについて子どもたちが工夫できるように様々な形の容器を用意したり、花をつぶせるすり鉢を水道の側にと色水遊びコーナーを作りました。



保育者が環境を整えたことで子どもたちも自分から水の量を調整したり、どの花なら色が出やすいか試して子どもたち同士で教えあったりしながら色水遊びを楽しみ、水に親しむだけでなく色の変化についても探求することができました。大好きな砂場でのお料理作りでも色水を活用して新しい料理を披露する姿が見られました。

幼児クラス3～5歳児は異年齢42名で活動しています。中には水が苦手な子もいるため色水遊びが一通り盛り上がったあとは次の展開として「泡」遊びも取り入れてみました。泡を加えたことで再度遊びが盛り上がり、今まで興味をもたなかった子どもも水遊びに取り組むようになり、水遊びが毎日継続されるようになっていきました。



水に触れた遊びが盛り上がってきた6月頃、砂場ではトラックや工事車両が好きな子どもを中心に、街づくりの遊びが始まっていました。

保育者は遊びを見守りながら子どもたちが作りたい街のイメージを他の子どもにも伝え、路を作れるように援助していきました。街づくりが一通り盛り上がった頃、子どもたちから「この路に水を入れてみたらどう？」という声がついにあがりました。保育者も協力しているんな容器で水を砂場に運び、砂場での水路遊びが始まりました。遊び始めた頃は保育者が一緒に水路を作っていましたが、毎日遊びが続いていく中で段々と子どもたち同士で工夫して水路を作っていく姿が見られるようになりました。特に年長児は子どもたち同士で作りたいイメージを共有し、子ども同士で役割分担しながら力を合わせて大きな水路を作ることができました。



水路づくりがしっかりと遊びこめるようになった7月からは、保育者が用意していた桶を置いておきました。砂で作っていた路よりもしっかりと水が流れていく様子を見た子どもたちからはどんな風に流すと水が勢いよく流れるのか実験してみたいという声があがるようになりました。

スコップだけでなくバケツやジョウロなど道具を工夫して水道と砂場を往復する子どもたちの姿を見守っていると、今度は子どもたちから「水を何度も運ぶのが大変!」「水を入れるだけだと（勢いがなく）流れない」という声があがってくるようになりました。



どうしたらいいか保育者が問いかけると、「桶を傾ける」というアイデアが子どもたちからでてきたので、保育者は桶を傾けるために必要な道具を揃えて子どもたちが桶を傾けるためにはどうすればいいか考えられるような環境に変えていきました。子どもたちの中で様々な試行錯誤がありましたが、最終的には砂場の横にある机を利用し、桶を傾けることに成功しました。思いきり水が流れるようになった時の子どもたちのワクワクした表情がとても印象的で、8月の暑い日が続く季節になっても、毎日のように桶での水遊びが続いていきました。桶を傾けて繋げるためには友達と協力することも必要になるため、子どもたち同士での対話も増えていく姿が見られていきました。



### 3. その成果と評価

一連の活動を通して、子どもたちは水に親しむだけでなく、その性質を利用してどうすれば自分たちが想像した通りのものが作れるのか思考したり、使うものを工夫したり、友達と役割分担し協力したりする経験を積むことができました。この活動は幼児クラスだけでなく、園全体での実践事例として園内研修で振り返りと紹介を行い、幼児期に育てたい10の姿にも繋がるプロジェクトとなったこと、子どもたちの姿を起点とした保育環境作りのポイントについて職員間で共通認識をもつことができました。

### 4. 今後の課題と展望

今後は大人自身がいまよりしっかりと砂場で遊びこむことや、水の性質を使ってどんな遊びの展開があるのかについて教材研究を行い、子どもの遊びの広がりや予測したり、子どもたちが遊びの中で試したり工夫したりできるよう、素材や用具を予め準備しておくことが重要であると改めて園内で振り返りを行いました。子どもたちが気づいたり試したりしたいと思ったその時に必要な道具をすぐ準備してあげることで、より水遊びや砂・泥遊びが深まっていくことを期待しています。

以上